

## 上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書（若手研究）

研究代表者 所属・職名 人文・社会教育学系・准教授

氏 名 長谷川 佑介

研究期間 令和元年度

研究プロジェクトの名称	英語教育研究の経験は大学院生チームの「実践力」を高めるか
研究プロジェクトの概要	<p>本学が掲げる「21世紀を生き抜くための能力+<math>\alpha</math>」を英語教育の文脈に当てはめると、英語教師を目指す大学院生の資質・能力を向上させるためには、例えば英文法の知識を学ぶだけでなく（基礎力）、学習者の文法エラーに対する効果的な指導法を考えたり（思考力）、それを現実の教育場で活用したりすること（実践力）が有益であると考えられる。本研究は、その一連の取り組みが大学院生の「実践力」にどのような影響を与えるかを検証したものである。具体的には、近年の英語教育研究で効果が見直されている間接フィードバックと呼ばれる指導技術に注目し、修士課程の大学院生が分担し、学部生の英作文に対して間接フィードバックを与えるという共同研究を行った。本研究では、このような具体的な取り組みが本当に大学院生の「実践力」の向上に寄与するかを検証した。</p>
<p>研究成果の概要</p> <p>※申請時にチェックした「取組課題」との関連とその成果も明記すること。</p>	<p>申請者が指導している修士課程の大学院生は昨年度より自主的に学会参加をしており、今年度も中部地区英語教育学会への参加を希望した。そこで、今年度は申請者と大学院生4名による共同研究を実施し、同学会での口頭発表に挑戦する運びとなった。申請者と大学院生4名の間で協議を重ねた結果、発表テーマは学習者の英作文に対する間接フィードバックの効果に関するものとし、約半年間にわたる研究体験を行った。</p> <p>一連の取り組みに参加した4名は、必然的に英語の文法・語法に関する議論を院生相互で行い、英語学習者に対する建設的な励ましのコメントを作文用紙に何度も書き込んだ。彼らへの紙面アンケートの結果では、実施前と比べて実施後のほうが「英作文の評価を効率的に行うことができる」などの項目についての自己評価が高まっていた。また、実際に十数編の英作文サンプルを評価する事前・事後課題に対する所要時間も短縮され、評価自体への自信度も高まっていたことから、修士課程における研究体験が実践力の向上に寄与していたことが確かめられた。</p>
研究成果の発表状況	<p>研究方法と成果をより詳細にまとめた論文を執筆し、下記題目にて『中部地区英語教育学会紀要 49号』に投稿し、査読のうえ掲載された。</p> <p>Hasegawa, Y., Miyajima, A., Nagasawa, S., &amp; Takayama, K. (2020). How learners modify their writing based on negative feedback: Comparing direct and indirect feedback. <i>CELES Journal (Journal of the Chubu English Language Education Society)</i>, 49, 55–62.</p>
学校現場や授業への研究成果の還元について	<p>本研究プロジェクトによる研究成果は、本学で実施している教員免許法認定講習等においても活用し、地域の教員にも積極的に還元する。また、2019年6月に北陸大学太陽が丘キャンパスにて開催された第49回中部地区英語教育学会 石川大会において口頭発表を行い、学外の研究者、英語教員、大学院生等と議論を行った。</p>